

すると近くで話を聞いていた吉野の息子の高校生が「ばあちゃん、インターネットで売ってあげるからアンティークを持っていないかな。つまり古くて珍しいものなんだけど」と横から口を挟んだ。

航平のばあちゃんはこんなもん売れるんかいな、と疑心暗鬼でホウロウ引きの昔の看板を二枚持つて行った。それをインターネットオークションにかけるとたちまち売れて自転車を買うお金ができた。ばあちゃんはさっそく隼人のかあちゃんのところへその話をして行った。かあちゃんは物置にしまつていたねじで巻く、古い柱時計を吉野に運んだ。それもすぐにいい値段で売れて、二人とも自転車を買ってもらったのだ。「この自転車が買ったのは吉野のいちちゃんのおかげなんだ」

「だ」隼人が言う、「僕も買物をしたかった。でもなにを買っていいかわからなくて。でも今日キャベツが買えてよかった」と航平が付け加えた。

「ありがとうございます。キャベツは重いから気をつけてな」チリンチリンと合図のベルを鳴らして万代橋の方に自転車を走らす二人を徳平はしばらく見送った。商店街の路面は梅雨明け間近の日差しにまぶしく光つており、その中を隼人と航平は吉野がある東の方角を目指して疾走して行った。

知らぬ間に徳平の側には夕子が近寄っていた。徳平はそつと夕子の手を握りながら考えた。

(インターネットで物の売買ができるようになったんか。それを利用して買物をする人が増えて、居ながらにして買えるから、わざわざ小売店にまで出かける

「だから僕たち、お礼をしなくちやと思つて」
「貯めたお小遣いで買えるものは何かと頭をしぼつたら」

「吉野はお好み焼き屋さんだからキャベツが一番いいだろうということだ」

「それでキャベツを買いにきて」

「いまから吉野に持つて行くんだ」

二人は代わる代わるに言った。徳平はなるほど。インターネットオークションか。そういう方法があつたのか、とすつかり感心した。

キャベツをひとつずつポリ袋に入れて、自転車の前カゴに運んでやった。二人は小さなサイフからお金を取り出してキャベツ代を支払つた。

「徳じいちちゃんのところまで前から買物をしたかった

ようになったんやな。うーん、便利な世の中になつたけんどこれは諸刃の剣や。小売業がさびれる原因や。けんど隼坊と航ちゃんが自転車をかうことができたから許そうかの」

夕子が徳平の手を控えめに引つ張つた。お絵かきの続きをみたいらしい。

「絵の続きを描きたいんか。そうや、人参の横にうさぎさんを描いて、じいちちゃんに見せてみ。うさぎさん2をうまく描けるかの」

徳平は夕子を見下ろしてやさしく言った。

夏休みになるまでに隼人と航平は八百徳に何回か寄つてくれるようになり、夕子と顔なじみになつた。そして夕子は徐々にこの二人には慣れてきて、もう樽の

後ろに隠れたりしなくなった。

徳平は夕子に三輪車とヘルメットを買ってやりたかった。三輪車だけではダメだ。今日日、商店街を通る中学生はヘルメットをかぶっている。交通事故が多いので、もしもの時に頭を保護するためだろう。三輪車に慣れていない夕子が転ぶと危ない。

徳平は斜め前の自転車屋を覗いてみた。三輪車はすぐに手に入った。

「三歳用の赤い色の、蒸れんように穴がぼつぼつ空いたる強化プラスチックのかっこいい軽いヘルメットはないかの」

自転車屋の店主は首を捻った。

「そななりクツげなモン、ウチになんかありますかいな。中学生がかぶる通学用の白いヘルメットなら置いて

てますけどな、すまんこつてす」

「どこに行ったら手に入るかの」
「そうやの。おつ、最近でけた大型ショッピングモールに行ったらあるはずや」

「そこはここから遠いがな。それに大型ショッピングモールは夕焼け通り商店街の商売敵や」

「八百徳さん、今さらそんなこと言うてもしやーないがな。そこは割り切らんとな」

自転車屋に諭されて、徳平は自分の店に入りながらヘルメットを手に入れる方法を考えた。そして危うく大型ショッピングモールに妥協しようかと思つた時に、お好み焼き屋『吉野』の高校生のことが頭に浮かんだ。

インターネットオークションではなんでも売ってい

るみたいだ。きつと『吉野』の高校生に頼めば、夕子用のヘルメットが手に入るかもしれない。インターネットでの売買も大型ショッピングモールと同様に小売業の商売敵には違ひはないだろうが、わざわざ遠い所に行かなくてもいい。それに……と徳平は考えた。久しぶりに吉野のお好み焼きを夕子と一緒に食べてみるか。

猛烈な暑さと共に夏休みがやってきた。

夕子はインターネットオークションで手に入れた赤いヘルメットをかぶり、さかんに三輪車を店の前で漕いでいる。すでに隼人と航平に彼らの秘密基地を見せてもらっていたし、梅島神社でセミ捕りも一緒にするようになった。夕子はたちまち肌が小麦色に焼け、健康

そうになっていった。徳平のかみさんが話しかけるとくくと頷いたり、にっこりと笑ったり、ちよつと口を尖らせたりして気持ちを表情で表すことができるようになり、最初の無表情な顔つきが嘘だったように生き生きとしてきた。

今では徳平の手を少し強く引つ張って散歩に出ようというような身振りまでするようになった。しかしまだ言葉を発することはなかった。

徳平とかみさんは言葉が出ないことについて知能が少し遅れているのか、それともまだ三歳までの環境が影響しているのかと話し合ったが、らちがあかなかつた。しかし時折、夕子はクスクスと声に出して笑うようになった。そんな時には言葉が出ないということをおぼろげに忘れるほど夕子はとても可愛いかった。

栄治もすでに徳平が夕子を預かったことを知って時々やって来た。徳平からその顛末を聞くと、店の丸イスにすわって腕組みをした。そして店の前を三輪車で行ったり来たりしている夕子を目で追いながら言った。「徳さんよ。どうして、なんでわしに早く清が戻って来たことを言うてくれなんだ？ わしと徳さんの仲やで。えらい水くさいやないか。おまえさんはずっと家出をした息子のことを心配しとったの」

徳平はこう言われて栄治が祐一のことを思い出しはしないかと心配しながら、清が高校を中退して家を出したしばらくは気になったがもう四十にもなった男を相手にしてどうこうできんからそこは割り切ることにした、と言いつけがましく答えた。すると栄治は「わしの所にも孫が来んかの」とつぶやいた。

徳平は戸惑い、肩を落とした。やはり栄治は徳平が心配していた通り、息子の祐一のことを思い出してしまった。祐一の生死のことについて混乱してしまったようだ。

徳平は曖昧な表情を浮かべるしかなかった。栄治は続けた。

「祐一は東京で就職したからな。だが、もう嫁さんをもろうとする時期やな。ひよつとして孫もできとるかもしれん。わしは祐一に『仕事を第一にして、結婚したら家庭を守って、わしら親のことは心配せんでええ。忙しかつたら連絡せんでもええぞ』とよーに言いきかせたから、祐一はわしの言いつけを守って連絡はしてんが」

この言葉に、ああやはりと徳平は沈痛な気持ちにな

った。

(以上3月19日放送分)